

嬉野町吉田 1 号窯跡

—肥前地区古窯跡調査報告書 第7集—

1 9 9 0 ・ 3

佐賀県立九州陶磁文化館

は じ め に

当館は、昭和58年度から肥前磁器窯の調査研究を進め、大窯業地有田皿山（有田町、西有田町、山内町）から、蓮池支藩領の嬉野町吉田山の窯に調査対象を移してきました。本年度は、吉田地区のうちでも鍋島本藩の鍋島伝兵衛家領の吉田1号窯の発掘調査を行いました。その結果、蓮池藩領の吉田山と密接な関係をもって江戸後期に操業した窯であることが明らかになりました。

本書を刊行するにあたり、御指導、御協力をいただいた関係各位に深く感謝致します。

平成2年3月31日

佐賀県立九州陶磁文化館

館 長 牟 田 口 尚

例 言

1. 本書は平成元年5月29日～6月7日に実施した佐賀県藤津郡嬉野町大字吉田所在の吉田1号窯跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は大橋康二が担当した。
3. 出土品の実測・写真撮影は主に一瀬ますみが当たった。
4. 本事業については、次の方々の協力を得た。記して謝意を表す。

嬉野町中央公民館長岡貞義、嬉野町教育委員会社会教育係長戸田美徳、肥前焼窯元協同組合理事長副島栄一、同専務理事小林荒次郎、嬉野町文化財保護審議委員古賀敏朗、井手勝彦

調査参加者

江口製陶所、副久製陶所、虎双窯、琥山製陶所、聖秋窯、一松陶苑、松安製陶所、副武製陶所、博鵬陶器、大渡商店、副正製陶所、新日本製陶、谷鳳窯、いおり窯、雄山製陶所、辻与製陶所、以呂波窯、劉美窯、カネツジ、副鉄製陶所、副千製陶所、古田陶器

地主

坂元照雄

その他

林田正直

本文目次

I	調査の経過	1 頁
II	遺跡の概要	2 頁
III	遺 構	4 頁
IV	遺 物	8 頁
	ま と め	15 頁

挿 図 目 次

Fig. 1	古窯跡位置図	3 頁
2	吉田 1 号窯跡地形図	5 頁
3	吉田 1 号窯 A T・B T 平面図・断面図	6 頁
4	吉田 1 号窯 C T・D T 断面図	7 頁
5	吉田 1 号窯出土品 (1)	9 頁
6	吉田 1 号窯出土品 (2)	10 頁
7	吉田 1 号窯出土品 (3)	12 頁
8	吉田 1 号窯出土の窯道具	13 頁
9	吉田 1 号窯出土の窯道具の拓本	14 頁

図 版 目 次

P L.	1 - 1	吉田 1 号窯跡遠望
	1 - 2	吉田 1 号窯窯尻付近 (発掘前、南西から)
	1 - 3	吉田 1 号窯焼成室 (西南から)
P L.	2 - 1	吉田 1 号窯焼成室右隅 (A T) (南から)
	2 - 2	吉田 1 号窯焼成室右隅 (A T) (西南から)
	2 - 3	吉田 1 号窯焼成室右隅 (A T) (南から)
P L.	3 - 1	吉田 1 号窯焼成室 (東南から)
	3 - 2	吉田 1 号窯焼成室奥壁裏の石積み状態 (南から)
	3 - 3	幕末の吉田・白岩山絵図 (佐賀県立図書館蔵)
P L.	4 ~ 9	吉田 1 号窯出土品

I. 調査の経過

1. 調査に至る経過

肥前地方の江戸時代の古窯跡は佐賀県内だけでも約225ヶ所以上分布している。そのうち有田など佐賀本藩領内の窯の調査は比較的進んでいるが、支藩である武雄、鹿島、蓮池領などの窯跡の調査は遅れており、その特色も明らかではなかった。

当館は昨、平成元年度に蓮池領の吉田山のうち、吉田2号窯の発掘調査を実施した。その結果、吉田2号窯は、1650年代ごろに開窯し、その後ほとんど絶えることなく明治後半から大正の中で廃窯するまで操業し続けたと推測された。しかし、吉田山がいつごろ開窯したかについては、この吉田2号窯よりもさらに古く開窯したとみられていた鍋島伝兵衛家領の吉田1号窯の発掘調査を必要とした。よって、当館は、江戸時代、佐賀本藩の鍋島伝兵衛家領の窯場であった白岩山の吉田1号窯跡の発掘調査を実施した。

2. 調査組織

○調査団長

牟田口 尚 佐賀県立九州陶磁文化館長

○調査員

前山 博	同 副館長
大橋 康二	同 学芸課資料係長
吉永 陽三	同 学芸課普及係長
鈴田由紀夫	同 学芸課学芸員
宇治 章	同 学芸課学芸員

○事務局

畑山 尚正	同 総務課長
松尾 健	同 総務課庶務係長
吉牟田 敏	同 総務課主事
浦川 信子	同 総務課主事
福島 晴人	同 総務課員

II. 遺跡の概要

この窯跡の歴史は、蓮池藩領の吉田皿屋（吉田2号窯跡など）より古く17世紀前半には開窯していたという説も強かった。しかしこれを証する確実な史料はなく、白岩山（註）の存在を確実に示す史料は、幕末の絵図（PL.3-3）と、明治14年の『陶器製造沿革調』（史料1）である。後者には「藤津郡吉田村字白岩山」の窯1登り、14室とあり、窯焼としては宮崎、小原、大串、井上、石井の5名の名が記載されている。そして1ヶ年の焼成回数は4回、製品種類は奈良茶碗・煎茶碗があげられている。前者の幕末の絵図には9室の登り窯が描かれている。

これより遡る史料としては有田の『皿山代官旧記覚書』文政12年（1829）に「上吉田山登」とある。中島浩氣『肥前陶磁史考』昭和11年に「中通一名上吉田」とあることから、この「上吉田山登」は白岩山＝吉田1号窯の可能性が高い。この1829年の「上吉田山登」の記録（史料2）には、近年、窯が大破し、窯焼達も大変困窮し、窯を焼くこともできないでいる。去年の冬以来、ようやく小窯5室を2～3回焼いたが、これだけではどうしようもないので、残る5室の焼成室を塗り替え（修築）たい。ついてはその資金を借りたいと有田皿山代官所に願い出た。それに対し、代官所は、この窯は地土（地元の陶石）を使用しており、さらに薪や水からうすなどの便利も良いので、資金を貸与する方針を打ち出している。

吉田1号窯と谷を隔てた南側の山斜面に古い墓地があり、古い墓石としては、寛政10年（1798）馬場新右衛門、文政7年（1824）馬場祐エ門以降大正までの墓石がある。

注 古賀敏朗氏のご教示による。写真も提供して頂いた。

史料1 明治14年の『陶器製造沿革調』

藤津郡吉田村 字白岩山	
所 有 主 ノ 姓 名	宮崎実右エ門 小原八郎次 大串寅次郎 井上猿之助 石井儀七
窯 及 間 口	1 登り14個 口1間半 3個 口2間半 11個 入2間 入4間
1 窯 製 出 高	凡金140円
1 ヶ 年 焼 ク 度	1 窯 4 度 総テ内国用
職 工 人 員	細工人115人 荒仕子660人 但窯14個1度分 絵書199人 雇女330人
全 賃 銀	細工人1日1人50銭 荒仕子25銭 但飯代共 絵司全 40銭 雇女 10銭
製 品 ノ 類 分	奈良茶碗 煎茶碗
1 ヶ 年 消 費 薪 炭 価	
1 ヶ 年 製 造 品 総 代 価	凡金7,840円

史料2 『皿山代官旧記覚書』文政12丑日記

上吉田山登之儀、近年釜々及大破、釜焼共ニも至極致零落、火入等をも不相叶候処、去冬已来漸小釜五間兩三度も積入相整候得共、右丈ニ而ハ弁利悪敷所詮取繋不行届、右相残居候釜之内壺間其上四間、都合五間之処、塗替相整候ハ、当時焼物売口宜敷仕入向も有之、永続之道も可取付候得共、何分自力を以普請方不行届ニ付、定額ハ目拝借被仰付度、積書を以願出候ニ付、役々見分相成候処、別紙之通達出ニ相成候、惣而、右山之儀ハ地土をも相用、殊ニ薪木水碓等之弁利宜、自余山々々ハ相違、勝手能一際振立可被申相見候、付而ハ、当時之御半ニハ候得共、願高之内定銀五貫目御取替ニメ、拝借被差出方ニ而可有御座、尚又、宜被遂御吟味候、



Fig. 1 古窯跡位置図

1. 吉田1号窯 2. 皿屋横道丁4063 3. 吉田2号窯
4. 祇園遺跡 5. 本源寺窯 6. 大草野窯 7. 美野窯
8. 上福窯 9. 丹生野溜池窯跡群
10. 志田西山窯跡群 11. 志田東山窯跡群

III. 遺 構

吉田1号窯跡は吉田の中通り地区の小谷の奥にある。茶畑を南から北へと登っているが、窯尻付近は竹林などで保存状態がよいとみられた。茶畑の中に窯跡の名残かと思われる大小の段が観察される(PL.1-1)。窯の東側に並行して登る小径があり、逆の西側に土手状の高まりがあり、その西側は深い凹地がみられる。この土手状の高まりが物原であることは表面に散乱していた陶片などから推測できた。

窯体構造の確認のために窯尻付近は竹林にA、Bの2つのトレンチと、西側の物原の調査を目的として、C、Dの2つのトレンチを設定して発掘調査を行った(Fig. 2)。

○A T・B T

窯体の保存状態がもっともよいとみられた竹林部分にA T・B Tを設定したが、発掘調査の結果、焼成室1室を確認した(Fig. 3)。窯幅は8.05 m、奥行4.65 mを測る。窯壁は奥壁・側壁ともにレンガ状のトンバリ(従来の報告書では「トンバイ」と表記していたが、江戸時代には「トンバリ」と呼ばれていた)を用いているが、下の焼成室との間の奥壁部分は砂岩質の割り石がみられ、その焼成室側は砂岩の剝離したものに窯壁のガラス質の面が認められる。砂岩部分の北側は地山とみられる黄色粘土であり、奥壁から45cm程の間隔をおいて、10cm程の深さと25~38cmの幅をもつ溝状の凹地がみられる。この底面付近は焼けてレンガ色を呈す。ここは火床の痕跡と推測される。江戸後期の肥前の窯構造は温座の巢(通焰孔)より火床面が20cm位低いのが普通だからである。よって原状は失っているが、砂岩と黄色粘土上にもう少し高く積まれた上に、温座の巢が設けられていたものと推測できる。

また火床部分より北側も1 m位の範囲は攪乱されており、火床境(火アゼ)や砂床は消失している。しかし、それより北側の砂床は遺存しており、タタキ状の固くしまった面の上に黒色の砂状土が2 cm位堆積している。この固い面はほぼ水平に築かれているが、北側の奥壁から南へ1 m位のところから微かな勾配をもって奥壁へと下っている(Fig. 3の①断面)。

またこの下ってゆく部分では固い面の上の砂が比例して厚くなり、そのため砂の上面はほぼ水平である。なお、この固い床面の下は火熱を受けて地山の粘土が赤褐色を呈す。

北側の奥壁はほぼ垂直に立上がり、表面は黒褐色のガラス質になっているが、その裏はトンバリで積成されているため、表面にもトンバリの形が浮き上がって見える。トンバリのサイズは必ずしも一定していないようであるが、18cm×20cm×16cm程度の大きさのものが多くみられる。奥壁部分は右奥の保存状態がよいので詳しくみてみよう。温座の巢下底までの奥壁の高さは約80cmであり、トンバリは5段に積まれている。温座の巢は通焰孔の幅約8 cm、高さ約13cmであり、柱の幅は約13cmを測る。通焰孔の数は窯幅から推算するとおよそ38個程と想像される。Fig. 3の②エレベーションは奥壁より44cm手前で実測した図である。この部分の床面はほぼ水平であるが、右側壁際50cm位は側壁に向って緩い勾配(約2度)で下っている。側壁は温座の巢下底面までは2度と微かに内傾している程度であるが、その上は21度と強く弓なりの傾きをみせる。

右側壁の奥壁より少し手前に色見穴が遺存する。温座の巢より16cm程の上方であり、穴は径10cm程で右斜上方へ焼成室外へ向って開けられていたものと推測される。

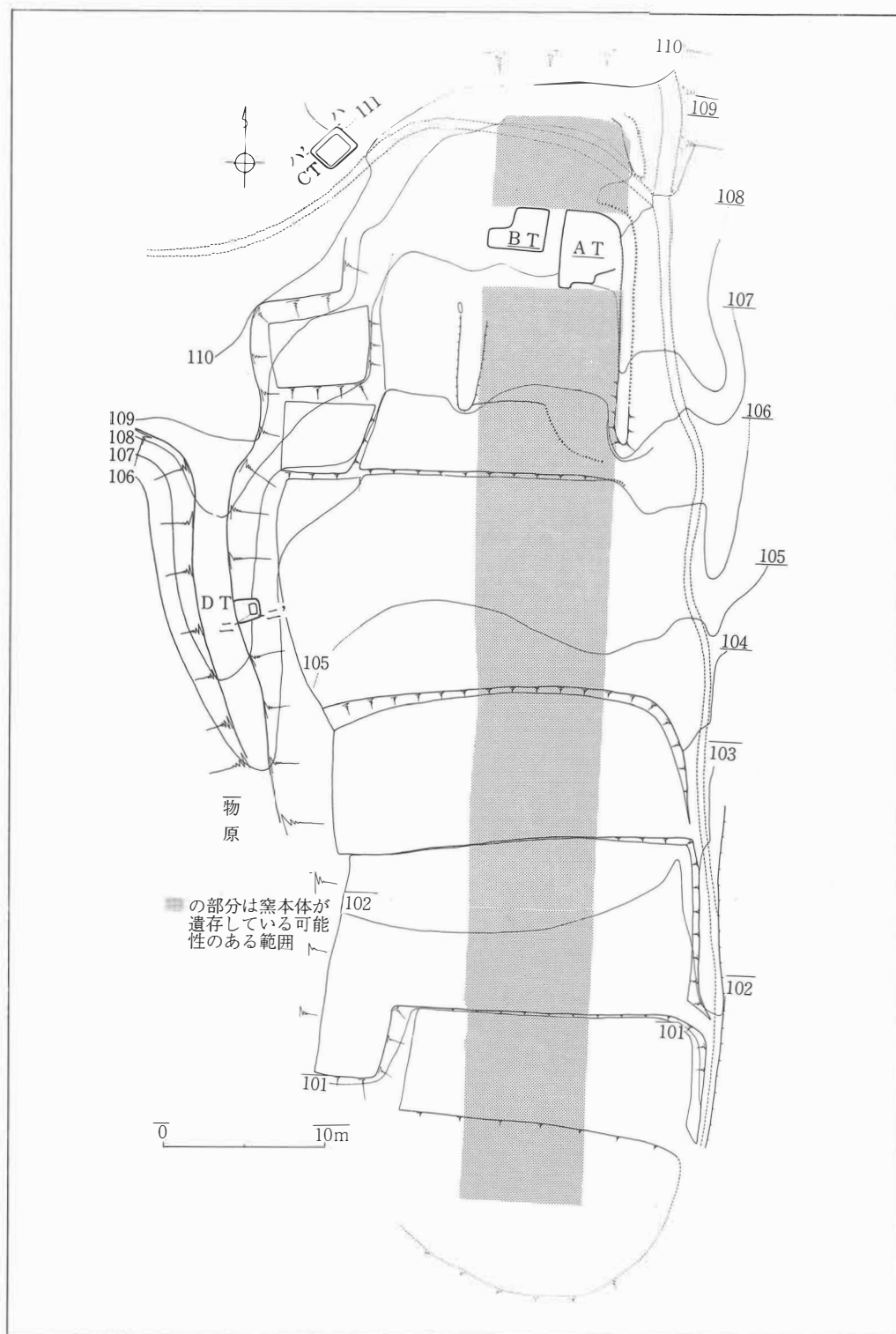


Fig. 2 吉田1号窯跡地形図

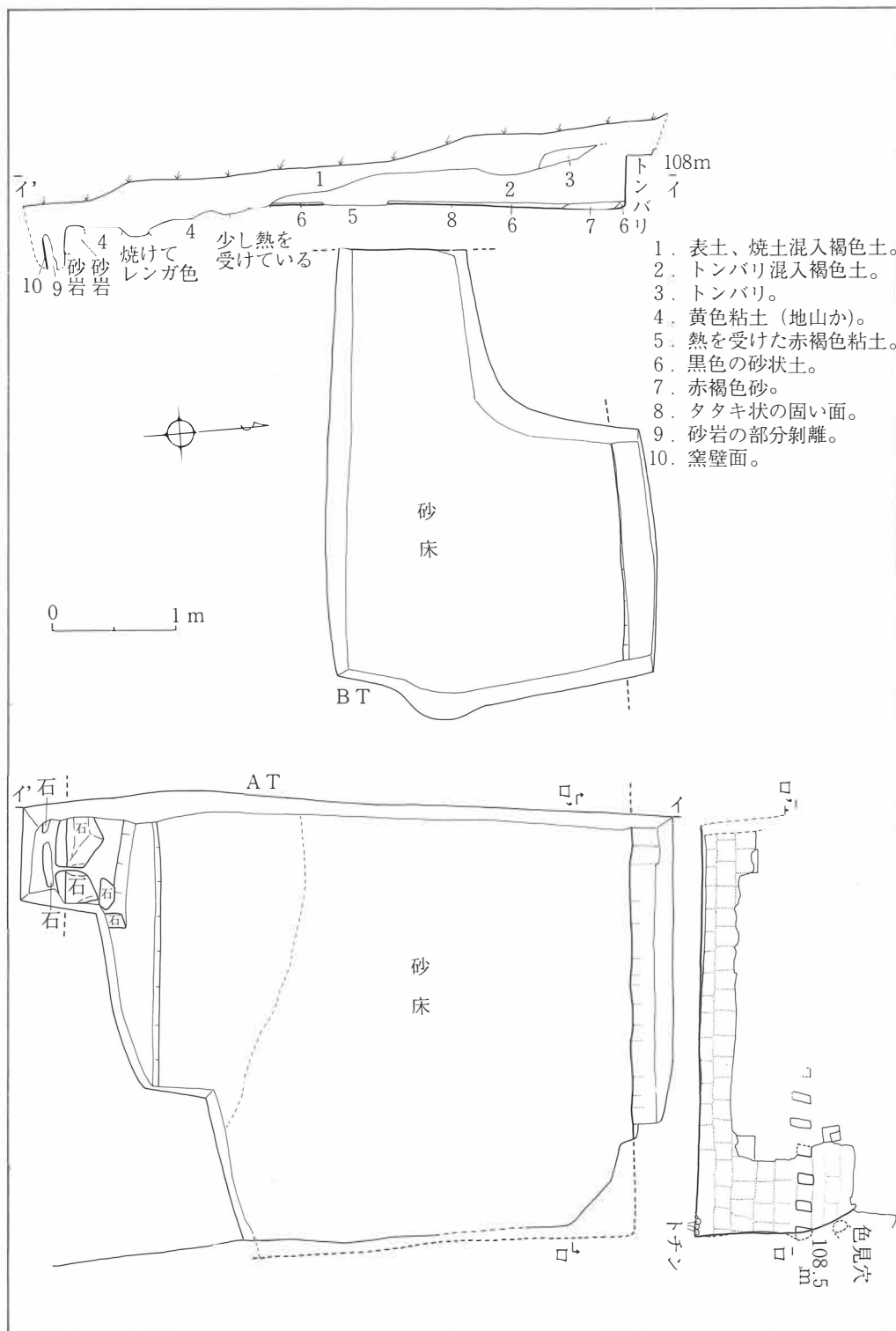


Fig. 3 吉田1号窯AT・BTの平面図と断面図

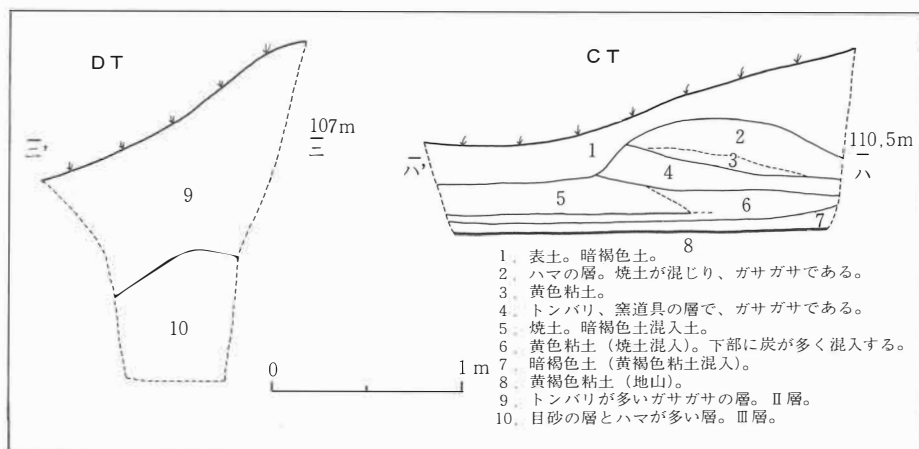


Fig. 4 吉田1号窯CT・DT断面図

奥壁際砂床上に長さ1m70cm、幅30~40cmにわたってトチンが集積された状態で検出された。

西側のBTでは奥壁のトンバリは失われており、最下段のトンバリも抜き取られており、砂床面より12cm位低く、トンバリ敷の面が検出された。この基礎ともいえるトンバリ面がどのように広がるのかは最終遺構を保存するため明らかにできなかった。

左側壁は砂床面より約57cmの高さまで遺存しており、ほぼ垂直であった。やはり床面のレベルは側壁際になると微かに下っており、壁際がいくらか低く作られていることが指摘できる。

窯体はこの焼成室の上方にさらに1室あると推測される。下方の焼成室が何室であるかは明らかではないが、地形からみると下方50m程に伸びるとみられ、奥行の長さ4.65mから推算すると10室程度の焼成室が設けられていた可能性が強い。

○CT

窯尻付近の西側の物原とみられた雑木林内にCTを設けて調査した結果、水平の地山面上に50~80cm位の堆積土がみられたが、下層からも明治の印判手などが出土しており、出土品からは年代順に堆積した形跡は認められず、廃窯ごろか廃窯後に移動した土の可能性が強い。

○DT

窯本体の西側14m程隔てて、土手状の物原が窯南半分に並走している。この物原に対して1.4m×1mのDTを設けて発掘調査を行った。その結果、Fig. 4のように1.2~1.6m程の深さまで掘り下げ、大きく2つの物原堆積層を確認した。表土(I層)の下に厚さ70cm程の窯壁片などがつまったガラガラの層(II層)があり、その下に60cm以上の厚さで目砂、ハマの多いざくざくした層(III層)がみられた。これより掘り下げることは崩落などの危険を伴うため中止せざるを得なかった。

IV. 遺 物

吉田1号窯の調査では窯体部分と物原から、製品、窯道具が多数得られた。

1. 製品

製品の種類は染付がほとんどであり、それに少量の白磁がみられる。器種は主に碗であり、ほかに小皿がある。これをトレンチごと、器種ごとに順次みてみよう。

○DTⅡ層

Fig. 5-1、2は染付筒形碗。見込にはコンニャク印判によるとみられる五弁花文を染付されるが、文様自体はつぶれて原形が明らかでないほどである。外面文様は区画内に草文を描くものと、若松文を散らしたものがある。Fig. 5-1の高台脇には雨竜文の崩れであろうか、2方に文様が描かれている。

Fig. 5-3～6は染付端反碗。Fig. 5-3の外面は縦縞に七宝つなぎを散らした文様を描き、見込は宝文、口縁部内側には雷文帯を配す。

Fig. 5-4はFig. 5-3と同文の蓋。高台内に染付銘を描く。Fig. 5-5は外面に独特の唐草文を描き、見込に松竹梅、口縁部内側に四方禪文を染付する。Fig. 5-6は外面に清朝磁器の影響とみられる唐花文を描き、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を染付する。

Fig. 5-7は染付蛸唐草文碗。見込に松竹梅文、口縁部内側に四方禪文を染付する。

Fig. 5-8は染付小碗。内面に草花に蝶文を描き、外面は蝶文(?)を三方(?)に染付する。

Fig. 5-9は染付丸文小丸碗。外面に丸文を三方(?)に描く。

○DTⅠ層

Fig. 5-10～14は染付端反形碗。Fig. 5-10の外面は甕を描き込んだもの。見込には松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を染付。Fig. 5-11の外面には麻葉文、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を配す。Fig. 5-12はⅡ層のFig. 5-6と同様の文様を描く。Fig. 5-13の外面は清朝磁器の影響で現れた文様。見込は松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を配す。Fig. 5-14の蓋の外面も清朝磁器の影響とみられる花唐草文を描く。見込は松竹梅文、口縁部内側には雷文帯、高台内には「乾」字を染付している。

Fig. 5-15～17は染付小丸碗。Fig. 5-15の外面は書物に草花文、Fig. 5-16は若松文、Fig. 5-17は寿字とみられる変形字と唐花文を交互に描いたもの。

Fig. 5-18は染付小皿。見込は蛇ノ目釉剥ぎしており、内側面に鳥居を含む山水文を描く。

○DT

Fig. 5-19～23は染付端反碗。Fig. 5-19は外面に梅樹文、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を染付する。Fig. 5-20の蓋は外面に菊花文、見込と口縁部内側に蝶かと思われる文様を描く。Fig. 5-21の蓋は外面に牡丹と丸に龍文、見込に松竹梅文、口縁部内側

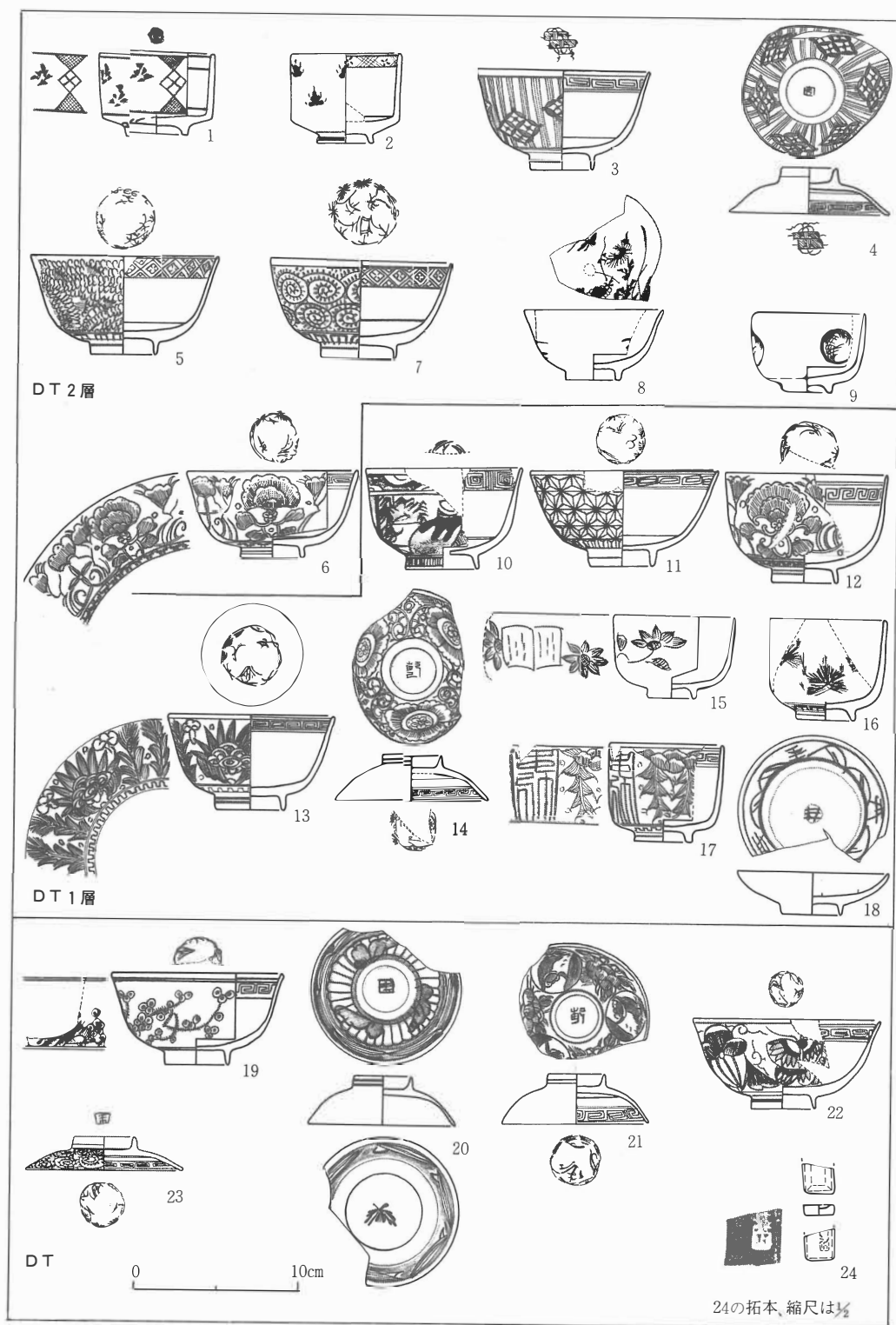


Fig. 5 吉田 1 号窯出土品(1)

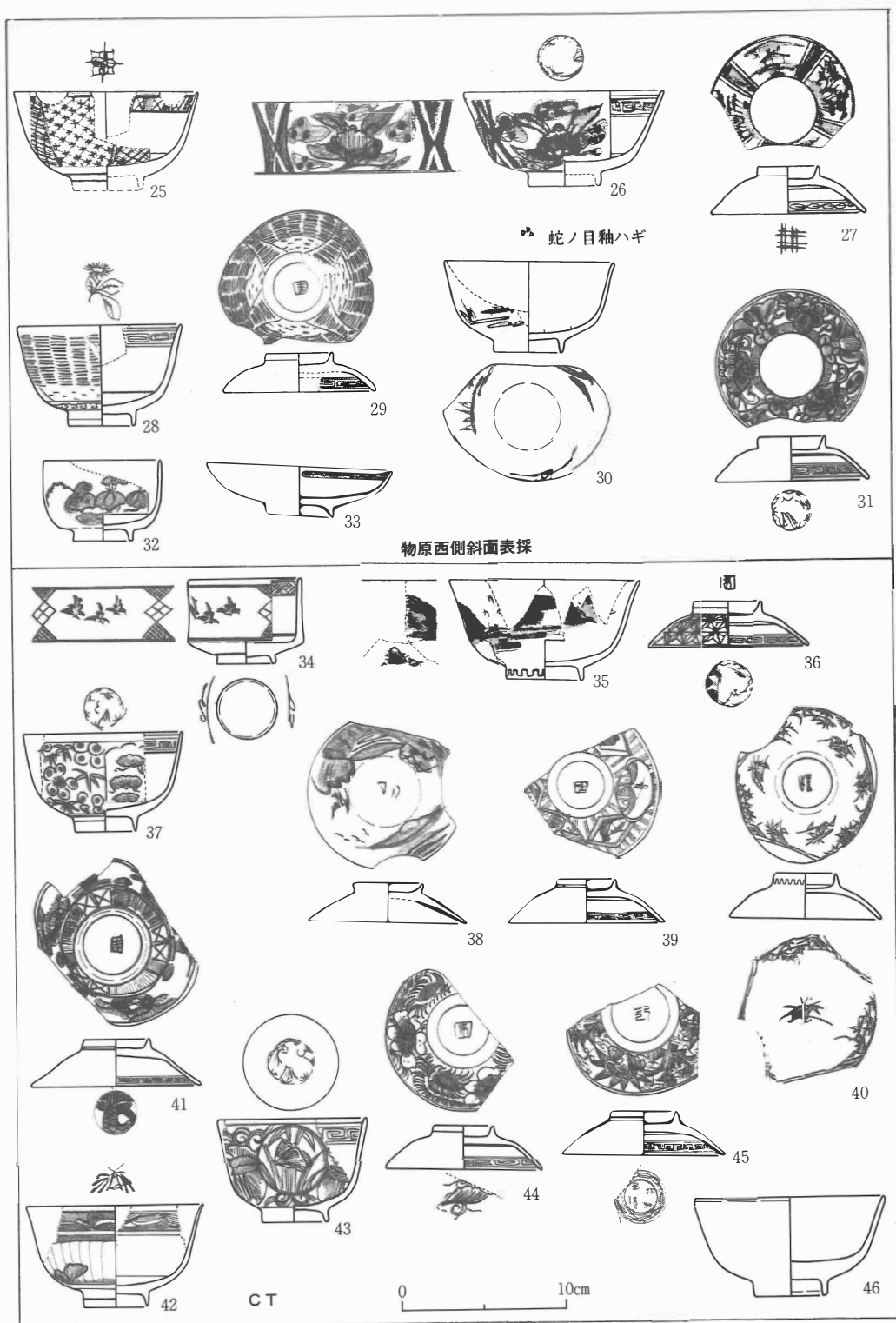


Fig. 6 吉田1号窯出土品(2)

に雷文帯、高台内に「乾」字を染付する。Fig. 5-22は外面に唐花と蝶文、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を染付する。Fig. 5-23の蓋は外面に蛸唐草文、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯、高台内に染付銘を配す。

Fig. 5-24は白磁の絵具解き皿であろうか。この窯の製品かどうかとも明らかではない。底部に押印の跡らしい陰刻がみられる。

○物原西側斜面表採

Fig. 6-25~31は染付端反形碗。Fig. 6-25は外面に幾何学文、見込に十字花文、口縁部内側に雷文帯の一種かとみられる文様を配す。Fig. 6-26は外面に区画内花文、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を染付する。Fig. 6-27の蓋は区画内に山水文などを描き、見込に格子目文、口縁部内側に渦文帯を配す。Fig. 6-28は外面に編籠文、見込に草花文、口縁部内側に雷文帯を染付する。Fig. 6-29はFig. 6-30と同様の文様を描き高台内に染付銘を施す。Fig. 6-30は外面に山水文らしきものを描き、見込にも草(?)文を描く。見込は蛇ノ目釉剥ぎしている。Fig. 6-31の蓋は外面に唐花文、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を染付する。

Fig. 6-32は染付小丸碗。外面に朝顔文を描く。Fig. 6-33は染付の小皿であろう。碗の蓋の可能性もないわけではないが、ここでは小皿として扱っておく。口縁部内側に染付圏線を引く。

○CT

CTは3つの土層ごとに遺物を取り上げたが、堆積層は移動した可能性が強く、土層ごとの報告に意味を認めないので、まとめて説明を加える。

Fig. 6-34は染付筒形碗。Fig. 5-1と同様の意匠であるが、見込は降灰が熔着し、見込の文様は明らかではない。

Fig. 6-35~45は染付端反形碗。Fig. 6-35の外面は山水文。Fig. 6-36は蓋であり、外面に麻葉文、見込に松竹梅文、口縁部内側に雷文帯、高台内に染付銘を施す。Fig. 6-37は外面に松竹梅文、見込にも松竹梅文、口縁部内側に雷文帯を配す。Fig. 6-38~41は蓋。Fig. 6-38は外面に山水文を描く。Fig. 6-39は簾に窓絵山水文、見込文不明、口縁部内側に雷文帯、高台内に染付銘。Fig. 6-40は内外に竹文、高台内に染付銘を配す。Fig. 6-41は欄干とそてつの文様、見込にそてつ文、口縁部内側に雷文帯、高台内に染付銘を配す。Fig. 6-42はFig. 6-20と同文。高台内に染付銘を施す。Fig. 6-43の外面は丸枠内に草と蝶を描いた文様を染付し、見込は松竹梅文、口縁部内側は雷文帯を配す。Fig. 6-44、45は蓋である。Fig. 6-44は外面に花唐草文、見込に宝文、口縁部内側に雷文帯、高台内に染付銘を配す。Fig. 6-45はFig. 6-13と同様の清朝磁器からとった文様を外面に描き、見込には「永楽年制」の篆書体銘が崩れた状態で描かれ、口縁部内側に雷文帯、高台内に「乾」字の篆書体銘が染付される。

Fig. 6-46は白磁の端反形碗。

Fig. 7-47は丸文、Fig. 7-48はブドウ文、Fig. 7-49、50は若松文を描く。Fig. 6-50は口唇部に鉄錆を塗っている。

Fig. 7-51は染付小坏。外面に印判文を染付する。

Fig. 7-52~55は型紙摺による染付であり、Fig. 7-52~54は碗の蓋。Fig. 7-52は外

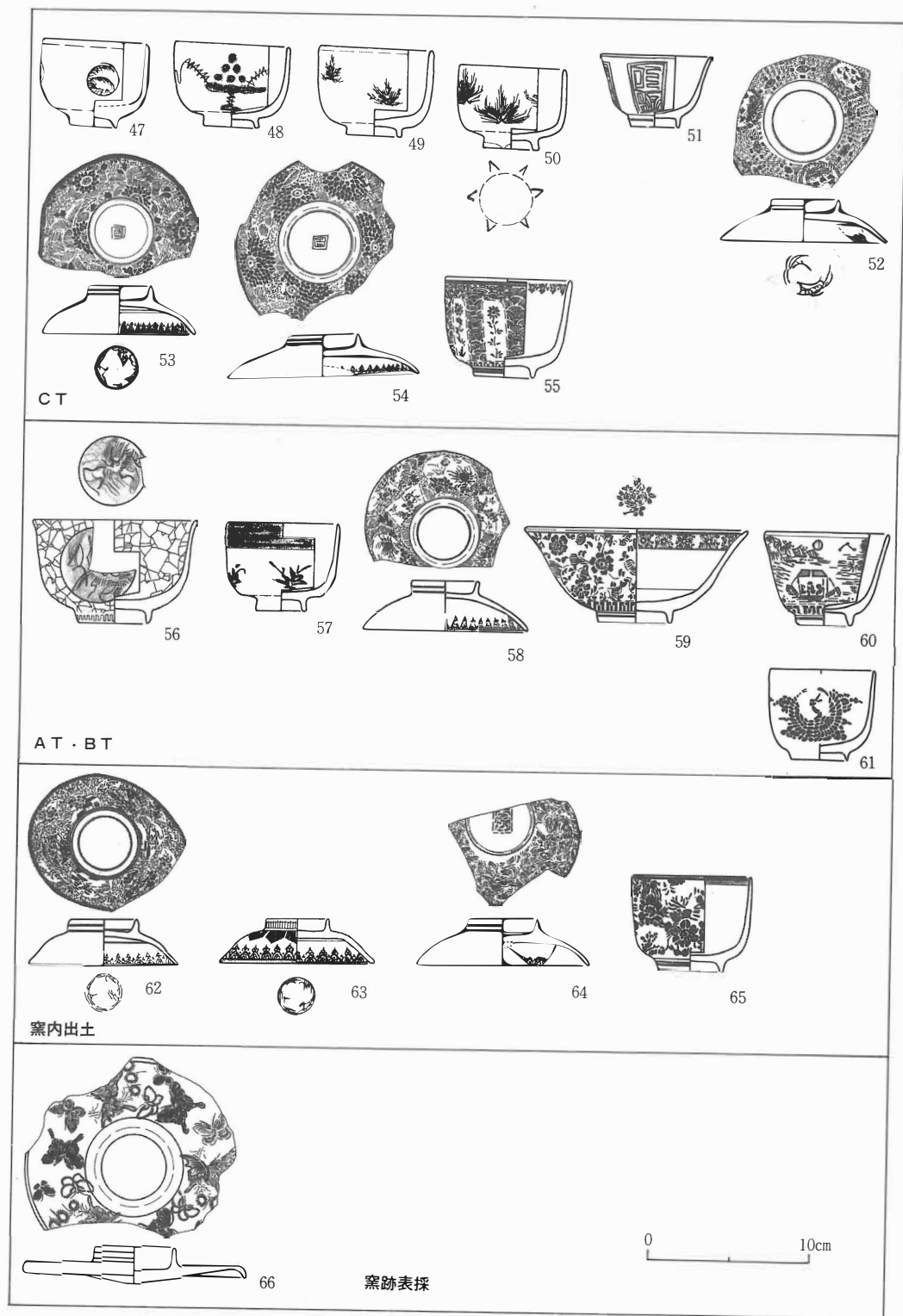


Fig. 7 吉田1号窯出土品(3)

面に窓絵波千鳥文を三方に配し、口縁部内側にリンボウ文帯、見込は手描きの松竹梅文を染付する。Fig. 7-53は外面に牡丹唐草文、口縁部内側にリンボウ文帯、見込は手描きの松竹梅文、高台内に染付銘を配す。Fig. 7-54は外面に菊唐草文を描くほかはFig. 7-53と同様の文様を配す。見込文の有無は別の陶片が熔着していて不明。Fig. 7-55は小丸碗であり、外面に青海波地に窓絵草花文、口縁部内側にリンボウ文帯を染付する。

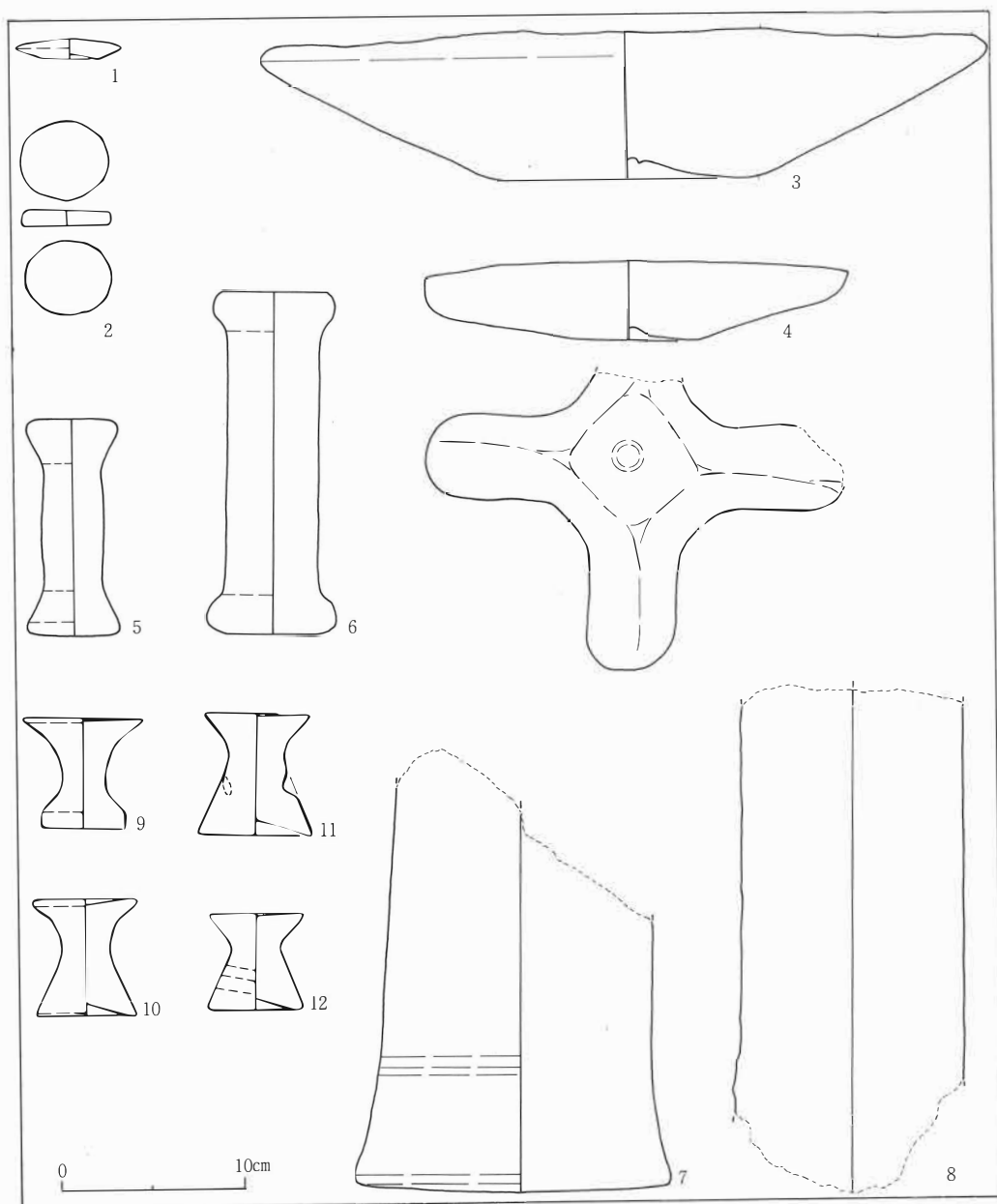


Fig. 8 吉田1号窯出土の窯道具

○A T・B T

Fig. 7-56は染付端反形碗。内外側面に氷裂地文を描き、外面は丸に龍文を配し、見込にも同じ龍文を染付する。

Fig. 7-57は染付小丸碗。外面口縁部は染濃みによる帯文とその下に折枝文を配す。

Fig. 7-58、59は型紙摺による染付碗。Fig. 7-58は蓋であり、外面に窓絵カニ文、書物などの文様を散らす。口縁部内側にはリンボウ文を配す。Fig. 7-59の外面は花唐草文、口縁部内側には桜花の連続文を描き、見込にはザクロの折枝文を配す。

Fig. 7-60、61は型紙摺による染付小丸碗。Fig. 7-60は外面に赤壁賦文を描き、Fig. 7-61は外面に団鶴文を染付する。

○案内覆土

Fig. 7-62~64は型紙摺の染付碗。Fig. 7-62は外面に窓絵山水文、書物文などを散らし、口縁部内側にリンボウ文を配す。見込松竹梅文は手描きで染付する。Fig. 7-63は外面に剣先蓮弁文を描き、口縁部内側にリンボウ文を配す。見込には手描きの松竹梅文を染付する。Fig. 7-64の蓋は外面に唐草文、口縁部内側にリンボウ文、高台内に「宮制」の銘を型紙摺で染付している。

Fig. 7-65は型紙摺による染付小丸碗。外面に草花文を染付する。

2. 窯道具

ハマ、トチン、シノが主たる窯道具であり、サヤはほとんどみられない。

ハマは逆蓋形ハマ (Fig. 8-1)、タタキハマ (Fig. 8-2)、大形ハマ (Fig. 8-3)、4枚羽根ハマ (Fig. 8-4) がある。量的にFig. 8-1、2のような小形のハマが多いのは主に碗類などの小形品を焼いたからであろう。Fig. 8-3には「リ」字がへら書きされている。

トチンは大小のものがある (Fig. 8-5~8)。Fig. 8-7、8のような大形トチンはFig. 8-3、4のような大形ハマと組合せて天秤積みの支柱として用いられたものと推測される。Fig. 8-7には「社」字がへら書きされており、Fig. 8-8には記号印が押捺されている (Fig. 9)。

シノは大小の形態差はあるが、Fig. 8-9のタイプとFig. 8-10~12のタイプがある。

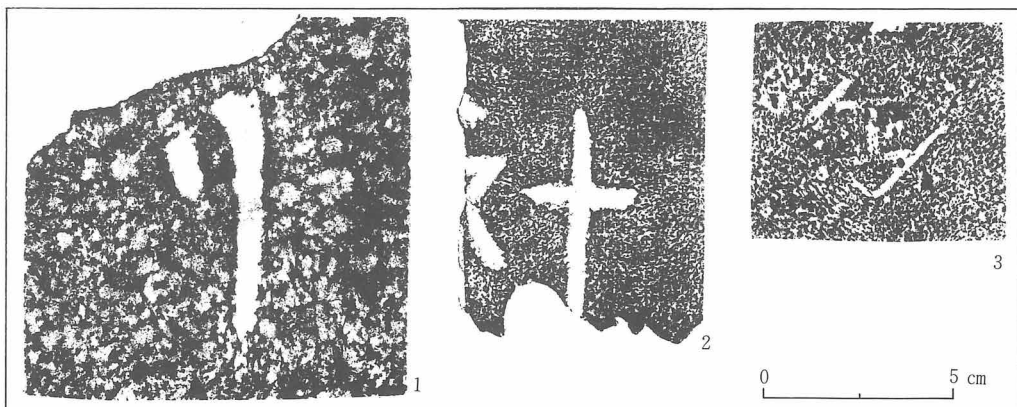


Fig. 9 吉田1号窯出土の窯道具の拓本 1はFig. 8-3、2はFig. 8-7、3はFig. 8-8の拓本

ま と め

吉田 1 号窯は全長50mを越す登り窯とみられ、窯尻付近の焼成室 1 室を発掘調査した。窯幅 8 m 5 cm、奥行 4 m 65cmであり、肥前の窯の変遷の中では第 6 グループ（焼成室平均幅 7.1 ～8.5 m^{注1}）に属する。第 6 グループの窯は谷窯、小樽 2 号新窯（以上、有田町）、広瀬向 2 号窯（西有田町）などがあり、いずれも19世紀に操業していたとみられる窯である。

出土品は飯碗と湯飲み碗が主である。

初期には湯飲み用の筒形碗（Fig. 5－1、2）と飯用の丸碗（PL. 4－1）がみられる。Fig. 5－1 の筒形碗は吉田 2 号窯でも沢山出土しており（吉田 2 号窯報告書Fig. 7－33など）、PL. 4－1 の丸碗も吉田 2 号窯で卍文の代りに丁字文を描き込んだもののがかなり多く出土している。

DT 2 層では初期の筒形碗と共に端反形碗や、筒形碗に代って文政ごろから湯飲みの主力となる小丸碗（Fig. 5－9）などが出土しており、広東形碗がみられないことなどから操業開始年代は文化よりそれほど遡らないのではないかと推測される。

以下、その他の吉田 2 号窯出土品と共通もしくは類似のものをあげてみる。

	吉田 1 号窯出土品	吉田 2 号窯出土品（報告書より）
草文筒形碗	Fig. 5－1	Fig. 7－33
丸文小丸碗	Fig. 5－9	Fig. 7－48
麻葉文端反形碗	Fig. 5－11、6－36	Fig. 7－53
唐花文端反形碗	Fig. 5－13、6－45	Fig. 8－68
鳥居文小皿	Fig. 5－18	Fig. 8－76
印判文小丸碗	Fig. 7－51	Fig. 7－51
蓮芦文小碗	PL. 7－5	PL. 8－6

以上のように、吉田 1 号窯の製品は吉田 2 号窯の19世紀の製品との共通点が多く、両窯の間に密接な交流があったことが推測される。

文政 7 年（1815）の「蓮池藩請役所日記」に吉田皿山の製品として「奈良茶 40俵 1 俵につき数30入、筒 60俵 1 俵につき数50入」が記されている。この「奈良茶」は「奈良茶碗」のことで蓋付の碗などの飯碗を指しているとみて間違いあるまい。また「筒」とは筒形碗のことと思われ、伊万里商人前川太兵衛宛の「長州下関虎や安右衛門書状」^{注3}などにもみられ、湯飲用であろう。こうした記録からも文政ごろの吉田山が飯碗、湯飲み碗を主として焼いていたことがわかる。

製品のうち、製品同志が熔着しているものは一緒に焼造したことが明らかなので、ここでいくつかの例を明示しておく。

PL. 5－3 は独特の花唐草文端反形碗と蛸唐草文端反形碗の蓋（Fig. 5－23と同類）と

山水文小丸碗が熔着している。

PL. 7-3 は花唐草文端反形碗 (Fig. 5-14と同類) と鳥居文小皿 (Fig. 5-18と同類) が熔着。

PL. 7-4 は若松と笹を描いた端反形碗の蓋と鳥居文小皿 (Fig. 5-18と同類) が熔着。

PL. 8-2 は山水文端反形碗 (Fig. 6-30) と唐花文端反形碗 (Fig. 5-6) が熔着。

以上のように、端反形碗と小丸碗とFig. 5-18のような小皿と一緒に焼かれたことが知られ、これらと型紙摺の製品とが熔着した例がないことが両者の間の年代差を示している。上記の熔着例は文政から1860年代ごろの間の製品と推測される。

廃窯年代に関しては、型紙摺であり明治になって一般化するコバルトを使用した染付が窯内覆土から多数出土していること、明治後期から盛行する銅版転写はPL. 8-5 などわずかなことなどから、明治中期には廃窯になったものと推測される。

記録上は、明治14年の『陶器製造沿革調』に記載されているが、中島浩氣『肥前陶磁史考』(昭和11年刊)によると、「此吉田の半地なる伝兵衛領邑だけは、本藩の支配に属するを以て、此地の窯焼へは特に宝暦12年より、有田泉山の磁石5百包だけ毎年採ることを赦されて、明治14年頃まで此皿屋に於いて製陶せしものである。然るに其後隣地なる蓮池領吉田山の勃興に依りて此地の窯焼は悉く之に移転するに至り旧吉田は全く廃窯に帰した」とあって、明治14年ごろに廃窯した可能性が高い。

PL. 9-2 の碗の高台内に「宮制」と型紙摺で染付しているのは、「宮崎製」の略であろう。明治14年の『陶器製造沿革調』にある窯所有主の一人「宮崎実右エ門」のこととみられる。

吉田1号窯出土品と同種の製品の消費地遺跡での出土例を若干、例示してみると、

	吉田1号窯 出 土 品	消費地遺跡出土例
角福・卍字散らし文丸碗	PL. 4-1	香川県乾遺跡(香川県教育委員会『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第1冊』1987の第20図10)
草文筒形碗	Fig. 5-1	熊本県人吉城跡(人吉市教育委員会『史跡・人吉城跡Ⅳ』1989のFig.19-3、4)
唐花文端反形碗	Fig. 5-13	同 上
若松文小丸碗	Fig. 7-50	群馬県洞遺跡(群馬県教育委員会『洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』1986の図版42-8)
印判文小碗	Fig. 7-51	北海道五稜郭跡(函館市教育委員会『五稜郭跡Ⅲ』1988の図版11)

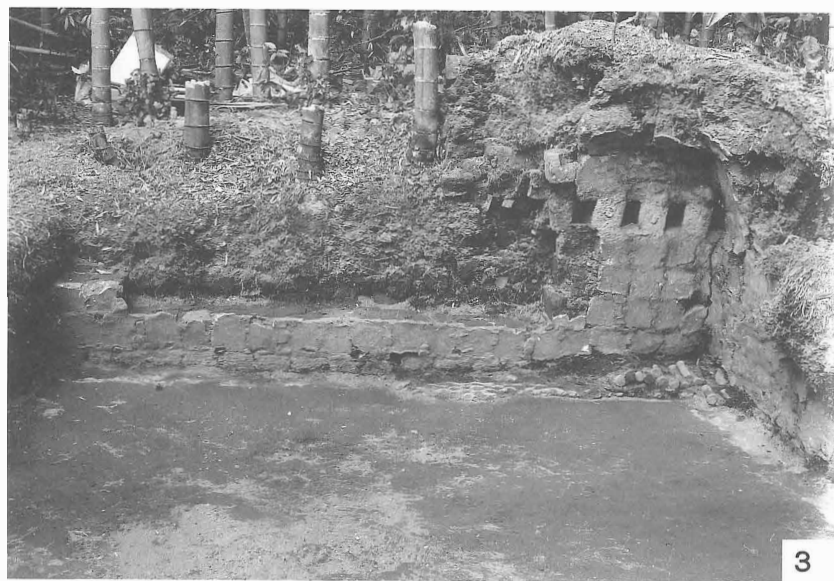
以上のように吉田 1 号窯は19世紀に日常食器の碗類を主として焼造した窯であった。この時期、有田皿山以外の肥前磁器窯の調査例として重要である。

- 注 1. 大橋康二「肥前古窯の変遷」『九州陶磁文化館研究紀要第 1 号』1986
2. 古賀敏朗「消えた焼物の道」『西日本文化』175号 1981
3. 前山博『近世後期における「伊万里焼」の流通』1977

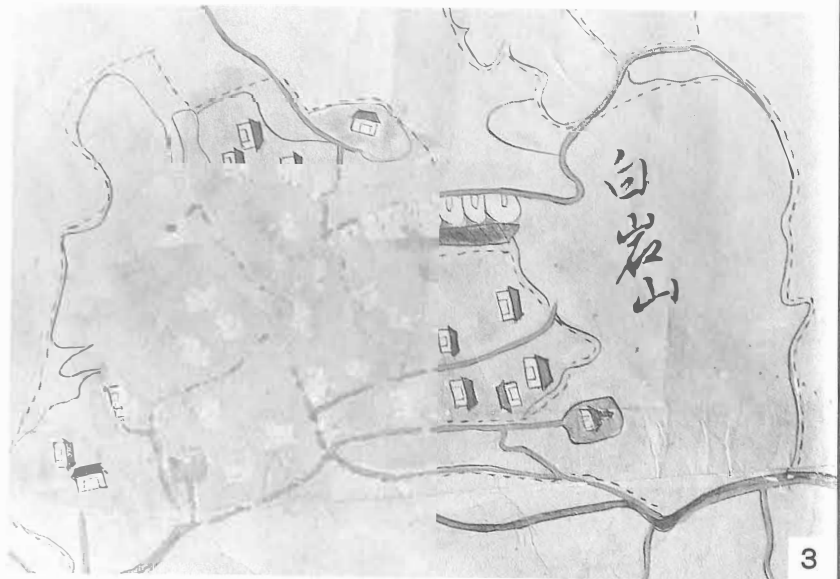
PLATES



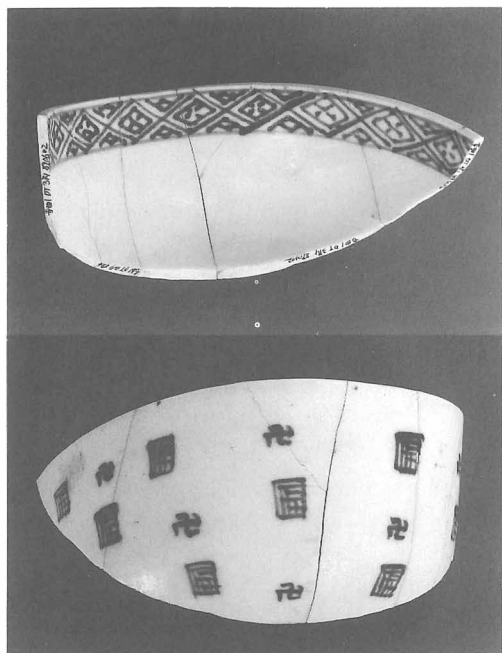
1. 吉田1号窯跡遠望
(写真中央に窯跡)
2. 吉田1号窯窯尻付近
(発掘前、南西から)
3. 吉田1号窯焼成室
(西南から)



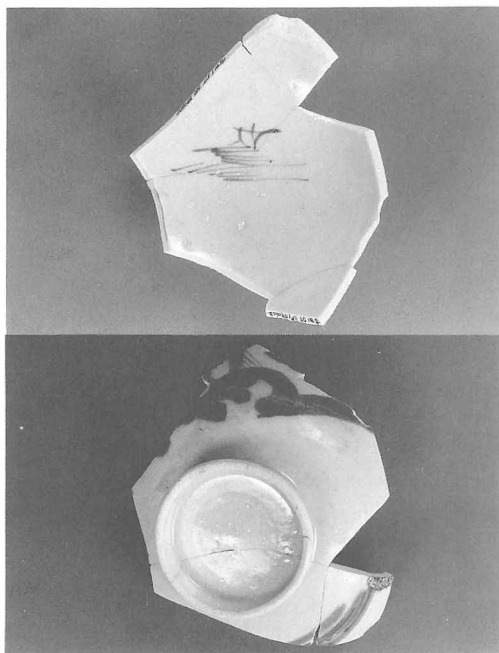
1. 吉田1号窯焼成室右隅(AT)
(南から)
2. 吉田1号窯焼成室右隅(AT)
(西南から)
3. 吉田1号窯焼成室右隅(AT)
(南から)



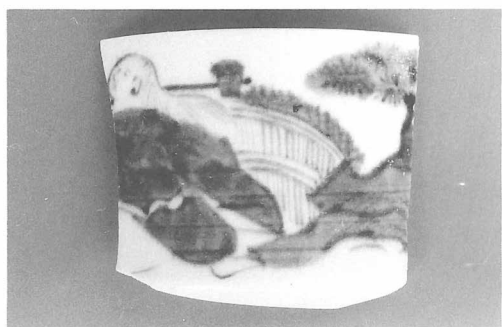
1. 吉田1号窯焼成室
(東南から)
2. 吉田1号窯焼成室奥壁裏
の石積状態(南から)
3. 幕末の吉田・白岩山絵図
(佐賀県立図書館蔵)



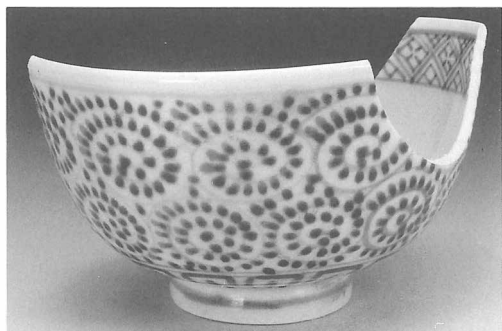
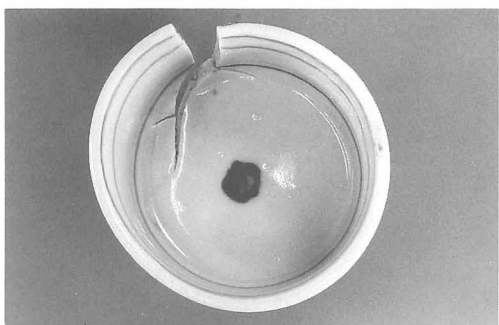
1. 染付角福巳字散文碗
(DT 3 層出土)



2. 染付見込帆掛船文碗
(DT 3 層出土)



3. 染付猩々文筒形碗
(同上)



5. 染付蛸唐草文碗
(DT 2 層出土)



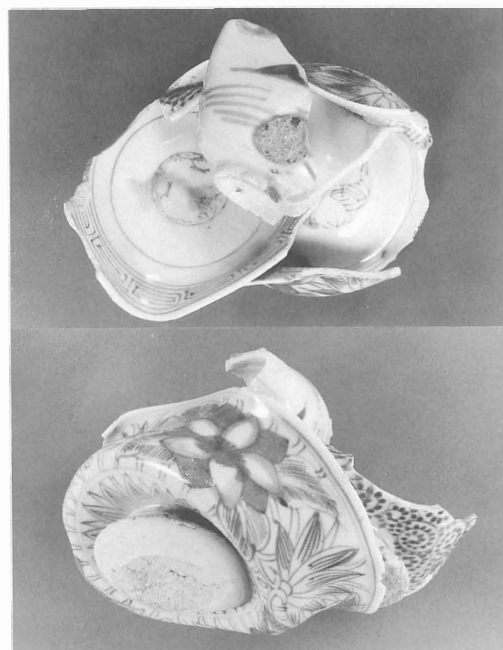
4. 染付折枝文筒形碗
(DT 2 層出土)



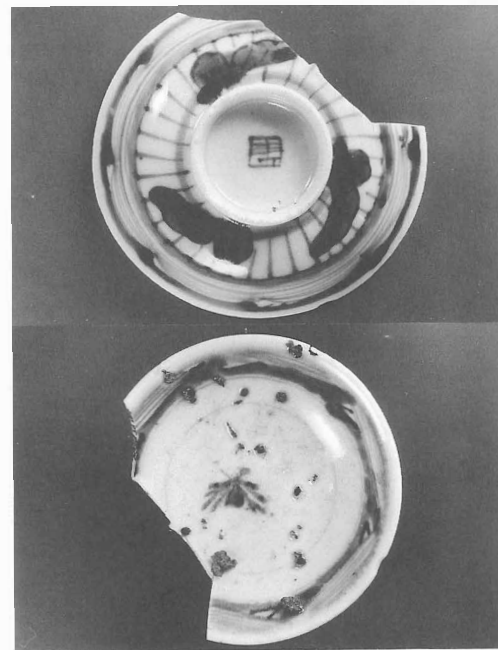
1. 染付簾に七宝文碗の蓋
(D T 2 層出土)



2. 染付簾に七宝文碗
(D T 2 層出土)



3. 染付碗 3 点が熔着
(同上)



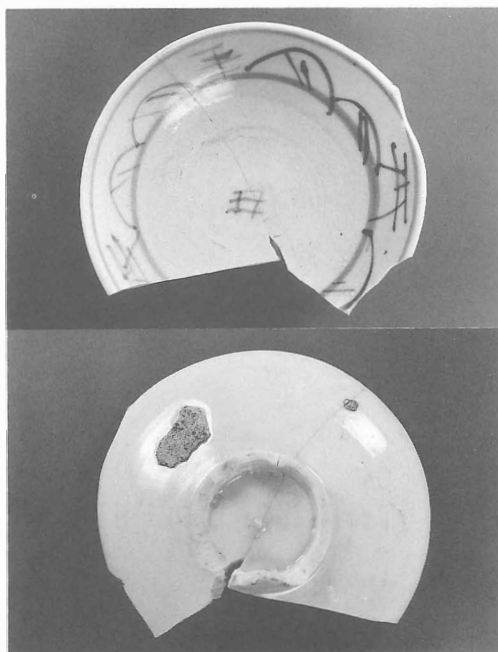
4. 染付菊文碗の蓋
(D T 出土)



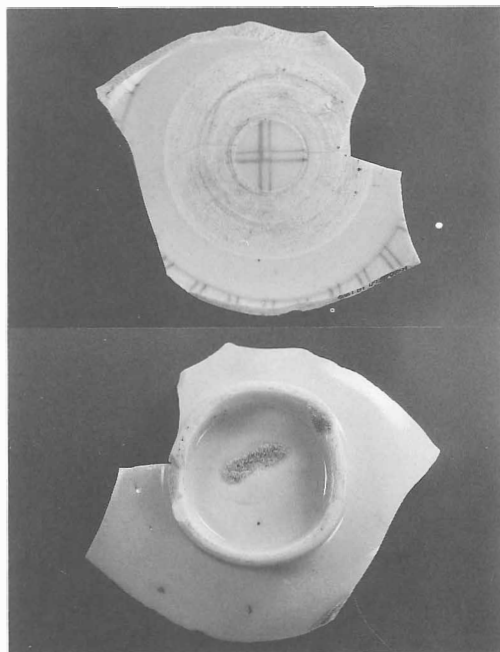
1. 染付唐花文碗
(DT1層出土)



2. 染付書物に草花文碗
(DT1層出土)



3. 染付鳥居山水文小皿
(同上)



4. 染付格子文小皿
(同上)



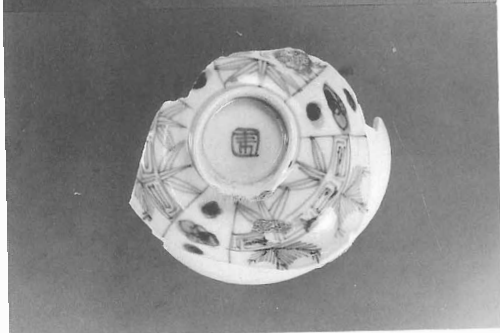
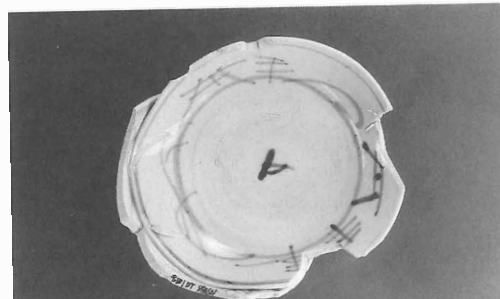
1. 染付麻葉文碗の蓋
(C T出土)



2. 染付竹文碗の蓋
(C T出土)



3. 染付碗と小皿が熔着
(D T 1 層出土)



4. 染付碗蓋と小皿が熔着
(D T 出土)



5. 染付蓮芦文碗
(C T 出土)



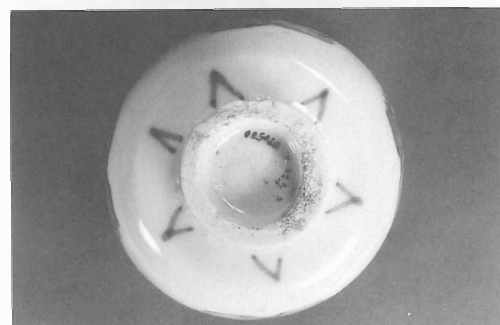
1. 染付草文碗
(物原西側斜面表採)



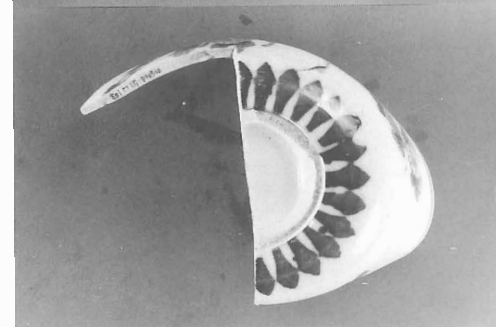
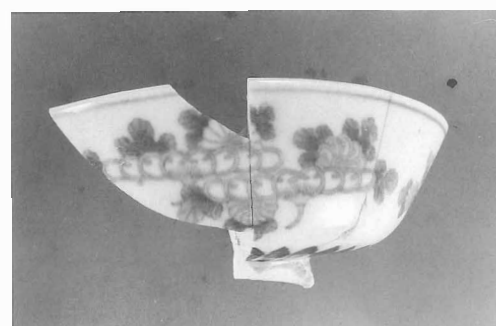
2. 染付山水文碗
(物原西側斜面表採)



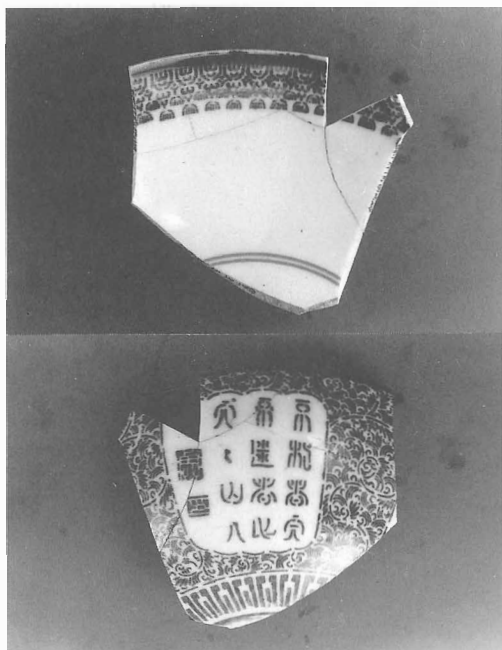
3. 染付若松文碗
(CT出土)



4. 染付印判文碗
(同上)



5. 染付銅版転写・型紙摺菊文碗
(CT出土)



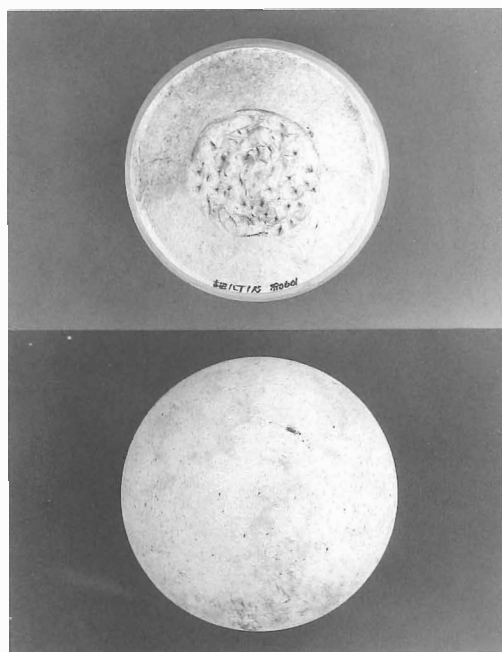
1. 染付型紙摺詩句文碗
(A T出土)



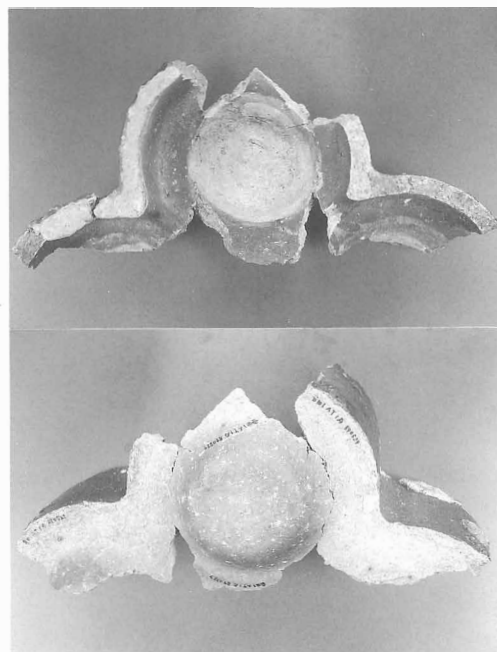
2. 染付型紙摺唐草文碗
高台内「宮制」銘(窯内出土)



3. 白磁「血液素」瓶
(窯内出土)



4. 白磁乳棒
(C T出土)



5. 窯道具(サヤ)
型成形による複連のサヤである
(A T出土)

肥前地区古窯跡調査報告書 第7集

嬉野町吉田1号窯跡

平成2年3月31日

発行 佐賀県立九州陶磁文化館
佐賀県西松浦郡有田町中部田ノ平乙3100-1
TEL 0955-43-3681

印刷 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617番地5